

## 「レイン・フォール／雨の牙」

\*\*\*

2009（平成21）年2月24日鑑賞＜試写会・梅田ブルク7＞

監督・脚本：マックス・マニックス

原作：バリー・アイスラー『雨の牙』（ハヤカワ文庫刊）

ジョン・レイン（日系アメリカ人の殺し屋）／椎名桔平

川村みどり（川村安弘の長女）／長谷川京子

ウィリアム・ホルツァー（CIAアジア支局局長）／ゲイリー・オールドマン

タツ（ベテラン刑事）／柄本明

トーマス・ペリマン（米国人ジャーナリスト）／ダーク・ハンター

優子（CIA職員）／清水美沙

川村安弘（国土交通省の高級官僚）／中原丈雄

ベニー渡辺（仲介人）／若松武史

健（CIA職員）／坂東工

2009年・日本映画・111分

配給／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

## &lt;原作は元CIA工作員の人気シリーズだが・・・&gt;

私は全然知らなかったが、この映画の原作はバリー・アイスラーが書いた人気小説『雨の牙』で、ここから派生した“ジョン・レイン”シリーズはこれまで全6巻が発行され、日本でも4巻が発売済みとのこと。そして、バリー・アイスラーは何と元CIA工作員という経歴の持ち主。プレスシートにはそんなバリー・アイスラーのインタビューが載せられているが、それによると①3年間のCIA勤務、②1993年からの東京での柔道の修行、③東京というまちへの関心、が主人公ジョン・レイン（椎名桔平）のキャラクターを生み出し、国土交通省を舞台とした骨太なストーリー構成の原動力となったことはまちがいないようだ。しかし、その出来は・・・？

## &lt;CIAは日本でどんな活動を?&gt;

私たち日本人はCIA（アメリカ中央情報局）が日本で活動していることなど全く意識していないが、この映画で重要な役割を担うCIAアジア支局長ホルツァー（ゲイリー・オールドマン）の行動を見ていると、「こんなすごい実績があるのか！」と愕然とするはず。ホルツァーのオフィスには副官らしき女性優子（清水美沙）や現場指揮者らしき健（坂東工）をはじめとする大勢のスタッフが集結している。また本作を見ていると、『LOOK』（07年）が問題提起した監視カメラが東京でもあらゆるところにセットされていることがよくわかる。つまり、ホルツァーはCIAアジア支局の総力を挙げて、「ある活動」を続けているわけだ。

しかし、待てよ。この映画が描いたような現実がホントにあるの？ひょっとして、これはバリー・アイスラーが勝手に想像しただけの面白いつくり話？そこらは、少し真面目に考えなければ・・・。

## &lt;あなたはジェイソン・ボーン派？それともジョン・レイン派?&gt;

椎名桔平が演ずるのは、父親が日本人、母親がアメリカ人でアメリカ国籍を持つ日系2世のジョン・レインという覚えやすい名前の暗殺者。プレスシートによると、「高校で入隊し27歳で軍の秘密工作員になる。アフガニスタン、イラク、南米・・・最後の18ヶ月はアメリカ海軍特殊作戦司令部にいた。アメリカがかかわった紛争でレインが知らないことはない」ということだから、その経歴はすごい。これなら、『ボーン・アイデンティティー』（02年）、『ボーン・スプレマシー』（04年）、『ボーン・アルティメイタム』（07年）で活躍中のハリウッドの大スター、マット・デイモンが演ずる暗殺者ジェイソン・ボーンに勝るとも劣らない経験と実力？

しかし、あなたは、ジェイソン・ボーン派？それともジョン・レイン派？

## &lt;一流暗殺者の三要素の充足度は?&gt;

私が勝手に設定する一流の暗殺者に必要な三要素は、①知力（冷静さ、分析力）、②攻撃力・防御力（銃、ナイフ、格闘技）、③自立力（孤独力、無関心力）。ジェイソン・ボーンもジョン・レインも優秀な暗殺者だから当然この三要素を備えているが、本作で私がマイナチ疑問に思うのは、なぜレインは国土交通省の高級官僚川村安弘（中原丈雄）の長女みどり（長谷川京子）をそんなに必死に守ろうとするの？ということ。

007ことジェームズ・ボンドも、21作目『007／カジノ・ロワイヤル』（06年）で6代目ジェームズ・ボンドになってからは、それまでの不良型・ブレイバー型からえらく真面目型に変身し、22作目の『007／慰めの報酬』（08年）ではオルガ・キュリレンコ演ずるヒロインのカミーユを守り抜こうとしたが、本作もそんな傾向が顕著。だとすると、レインは3番目の孤独力、無関心力に少し弱点が？もっともこれは、カミーユと同じようにみどりがあまりにも魅力的だから・・・？

## &lt;レインが依頼されたのは?&gt;

そもそも暗殺者をカッコいいと思わせるのは根本的なまちがい。つまり、依頼主からもらうカネによって非情に人を殺す暗殺者という職業は、依頼者を助け喜んでもらったうえで報酬を払ってもらう弁護士に比べると下の下の職業。ただ弁護士は、還暦を過ぎても①気力、②体力、③知力の三要素が続く限りはいつまでもできるが、暗殺者は第2の要素である攻撃力・防御力の点で、50歳を過ぎればさすがにキツく、働き盛りは30代？

映画の冒頭、東京に潜入してある依頼事件を処理中のレインが、仲介人であるベニー渡辺（若松武史）に文句をつけてるのは、単独行動を旨としている自分の仕事が誰かに尾行されていることに気付いたため。レインが受任した仕事は、国土交通省の高級官僚川村を自然死に見せかけて殺し、メモリースティックを奪うことだが、ひょっとしてこれは彼の最後の仕事？中盤からラストへと続くみどりと一緒に逃走劇をみていると、ついそんな風に思えてしまう。

それはともかく、地下鉄の列車内で携帯電話の操作によってうまく川村のペースメーカーを狂わせたのだが、ホームで倒れ込んだ川村が持っているはずのメモリースティックはどこにも見つからなかった。その結果、俺の他に誰かがこの仕事を関与しているの？レインがそう思ったのは当然だが、以降メモリースティックを奪ったと判断されたレインは、CIAからも警察からも追われることに。多数の監視カメラと多数のスタッフを駆使しながらレインと川村の動向を追っていたホルツァーは、相次ぐ失敗にイライラし、「ファック！」「シット！」と口汚い言葉を発し続けていたが、そんなホルツァーとレインの「対決」は物語のラスト近くになってから・・・。

## &lt;メモリースティックには、一体何が?&gt;

公務員改革は日本国にかかる大改革だが、それだけに官僚たちの抵抗は強く国民の目には全然その突破口が見えてこない。2008年11月に発生した2人の元厚生事務次官襲撃事件は高級官僚たちを震え上がらせたが、さて国土交通省では？

スクリーン上では、国土交通省の高級官僚がここ14ヶ月の間に2人も死亡したことを不自然だと見るベテラン刑事タツ（柄本明）が、さかんに首を捻っていた。そんな中、今日はCIAがその動静を探っていた川村が、地下鉄を下りたホームで心臓に埋め込まれたペースメーカーの異常によって死亡。監視カメラの映像によれば、その死体のポケットから何かを必死に探っているのが、これまたCIAが必死に追い求めていたレインだ。

CIAと川村、レインとの攻防戦の焦点は、川村が持っているはずの小さなメモリースティックだが、さてこれにはどんな重要な情報が？

## &lt;第7艦隊だけで十分?&gt;

民主党の小沢一郎代表が2月25日大阪市で述べた、在日米軍は「第7艦隊だけで十分ではないか」との発言が大きな波紋を呼んでいる。これは「対米追随脱却」と「対等な日米同盟」を目指す小沢氏の持論の一部を語ったものだが、これだけでは説明不十分。そのため一方では拓殖大大学院教授（安全保障）の森本敏氏からは「在日米軍には海兵隊と戦略空軍があり、海軍である第7艦隊だけでは抑止機能の一部しか果たせない」と批判され、他方では共産党の志位委員長から「軍拡の道を進むことでイコールのパートナーになるのは間違った道だ」と批判されている。その詳細や論点はここでは述べないが、小沢発言を私なりに読み解く限りでは、日米同盟の根幹部分や安全保障に関する作戦の根幹を民主党がここまで把握できているのかは大いに疑問。それと同じように、日本でCIAはどんな活動をしているの？なぜCIAが国交省の高級官僚が持つメモリースティックを必死で追っているの？そこらあたりのダイナミクスがバリー・アイスラー原作の醍醐味だが、私たち日本人はどこまで把握できているの？本当はしっかりその位置づけをすることが大切なのだが・・・。

## &lt;恐るべき秘密の計画とは?&gt;

その真相が明らかになるのは、レインが米国人ジャーナリストのトーマス・ペリマン（ダーク・ハンター）と接触し、彼から恐るべき情報を引き出した時。つまり、あのメモリースティックには、日本国を崩壊させるような恐るべき秘密の計画がインプットされていたのだった。なるほど、そういうことか？そういうこともありうるのか？これではやはり、日本が米国の従属的立場に甘んじざるをえないのも仕方なし？そんな風に納得してしまってはダメだが、この映画を観れば、そんなカラクリ構造に少しは触れることができるはずだ。

そう考えると、日本の国家的危機の克服そこので政局ばかりにうつつを抜かしている日本の政治家やマスコミは、「第7艦隊だけで十分」発言と同じようなノーライタの発想しかできていないのでは？

## &lt;21世紀の東京フィルム・ノワールは、ちょっと甘め?&gt;

プレスシートでは、本作はアメリカン・フィルム・ノワール、フレンチ・フィルム・ノワール、そして香港フィルム・ノワールに対置される、21世紀の東京フィルム・ノワールと紹介されている。フィルム・ノワールやファム・ファタールの勉強には『映画検定 公式テキストブック』（2006年・株式会社キネマ旬報社）がベストだが、私は本作を東京フィルム・ノワールと表現することには少し抵抗感がある。なぜなら、私の目（鼻）には暗殺者だったレインの過去は別として、本作のレインには全然犯罪の匂いがせず、逆にみどりを守ろうとするホワイトナイトの匂いが強いから。

21世紀の東京フィルム・ノワールは、こんなに甘めでいいの？

## &lt;最後のお仕事は？エンディングは?&gt;

本作のクライマックスはレインとホルツァーとの「対決」だから、そこはあなた自身の目でじっくりと。メモリースティックは何とも意外なところに隠されていたわけだが、あれやこれやの騒動の挙げ句、無事一件落着。そして、レインのみどりを守り抜くという重大な任務（？）も無事達成できたから万々歳。と思っていると、実はレインにはニューヨークに渡っての最後の大仕事が残されていたらしい。さて、そのターゲットは？しかし、レインのエンディングは東京からニューヨークへ。

他方、みどりのエンディングもニューヨーク。将来を嘱望されていたジャズ・ピアニストであるみどりは、今再びあのクラブでピアノを弾いていたが、同じニューヨークでの最後の仕事を終えたレインとの再会はあるの？カッコいい永久の別れのためには、絶対2人は会わない方がいいと思う私にとっては、このみどりのエンディングも少し甘め・・・？

2009（平成21）年2月28日記